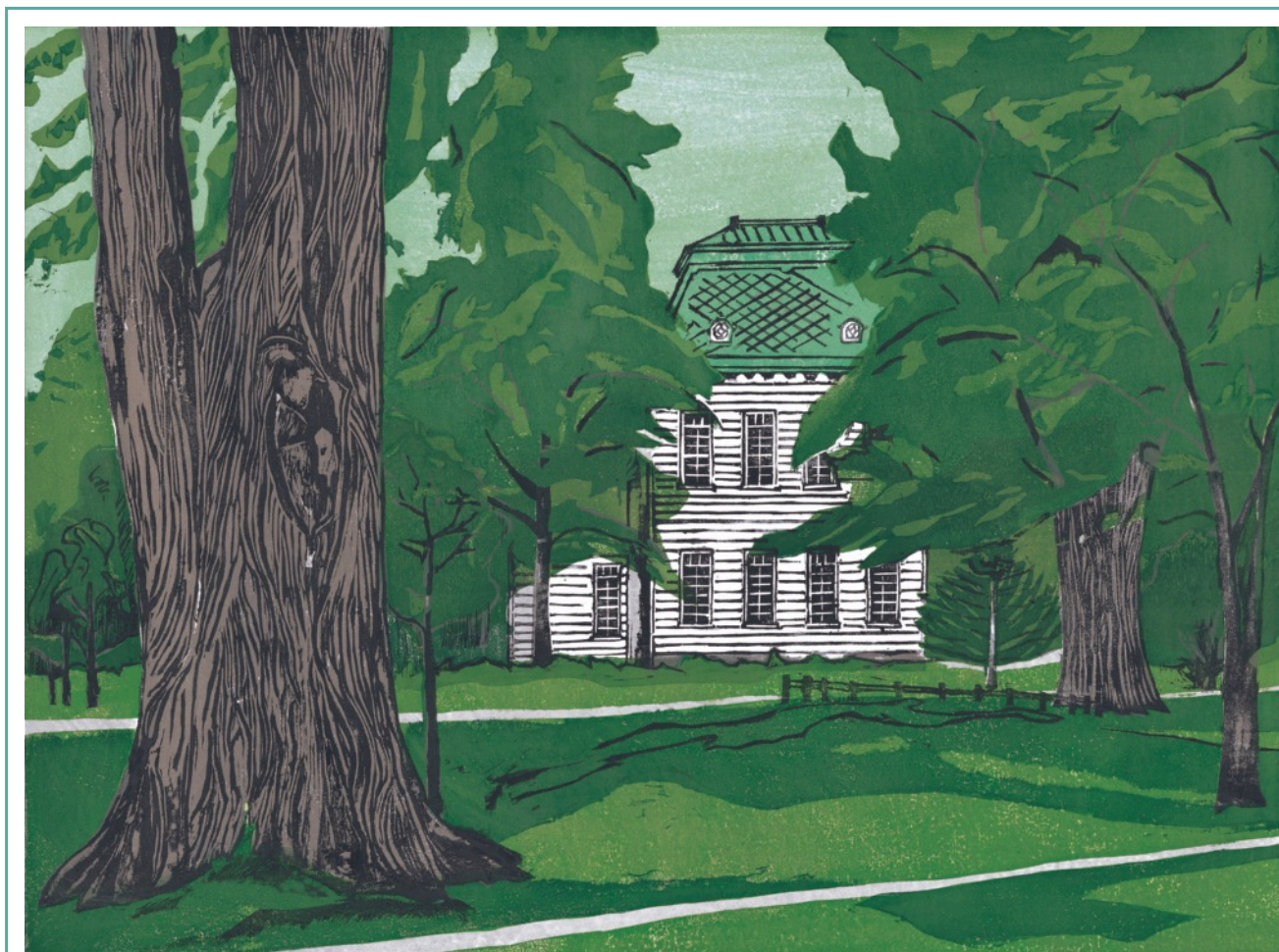




特集 今はなき文芸誌の精神伝える「北のアルプ美術館」
300号に刻まれた麗しき自然讃歌

ふるさとこぼれ話41 …『金色夜叉』ゆかりの松（置戸町）

——熱海の海岸での別離から10年。北海道で再会した貫一とお宮
ほっかいどうの本 ……『札幌から行く産直ガイド』『検証 拓銀破たん10年』『北海道論 北の情熱』

世界自然遺産「知床」を有する網走管内斜里町に

「北のアルプ美術館」という小さな私設美術館があります。

展示の中心は、今はなき山の月刊文芸誌『アルプ』。

山と真摯に向き合った作家や芸術家の作品に心酔し、

高潔な自然讃歌の世界の紹介を続ける館長の山崎さんに

同誌や知床の自然に対する熱い想いをうかがいました。



やまざき たけし
山崎 猛さん

北のアルプ美術館館長

一九三七年、松山管内乙部村(現乙部町)生まれ。中学卒業と同時に斜里町内の書店の住み込み店員となり、一九六六年に独立して事務機器販売会社を設立。事業を拡大する一方、写真家としても活躍。一九九二年に「北のアルプ美術館」を開設し館長となる。写真集に『永海』(山と溪谷社)、『日本の灯台』(ぎょうせい)などがある。

今はなき文芸誌の精神伝える「北のアルプ美術館」

山を愛し、山で思索した芸術家たち 三百号に刻まれた麗しき自然讃歌

■まず「北のアルプ美術館」の概要を説明していただけますか

かつて、東京の創文社が『アルプ』という月刊誌を発行していました。一九五八年三月に創刊し、二十五年後の一九八三年二月に三百号で幕を閉じた「山の文芸誌」です。

掲載されていたのは、山を思索の場とする作家や詩人、画家、学者らの自然讃歌ともいえる随想や詩などの作品です。コースガイドや登山技術の解説、広告といったものはなく

従来の山岳誌とは趣をまったく異にする小さな雑誌でしたが、誌面は高潔な雰囲気を感じ、自然、とりわけ山岳を愛する多くの読者の支持を集めていました。

編集の主軸は、当時、東京外国語大学教授だった哲学者で詩人、随筆家の串田孫一先生です。執筆陣には詩人の尾崎喜八、作家の深田久弥、ペン画家の辻まこと、版画家の畦地梅太郎、大谷一良ら多彩な面々が名を連ね、三百号までの誌面を飾りました。六百人を超える執筆者の中に

は、北海道在住だった坂本直行、更科源蔵らも含まれています。

当館は、その『アルプ』全号をはじめ、「アルプ作家」と呼ばれた執筆陣の生原稿、原画作品、著書、関連する資料などを集めて展示している私設の美術館です。執筆、編集者の皆さんのご協力をいただいて一九九二年六月に開館し、以来、入館無料での運営が続けています。

ほかに、藤田喬平のガラス工芸、一原有徳の版画など、私がこれまでの人生で出会った多くのアーティスト

トの作品も同時に展示しています。

なぜ一個人がそれほどまでするかとよく聞かれますが、『アルプ』は私の人生を豊かなものに変えてくれたかけがえのない書なのです。『アルプ』のおかげで足元の自然の素晴らしさに気付き、その感動を写真で伝えることがライフワークの一つになりました。この雑誌に出会わなければ、私の人生は今よりかなり味気ないものになっていたでしょう。

自然と芸術を通じ、人間性を高めようとしたのが『アルプ』です。そ

の精神を伝える小さな美術館が、世界自然遺産の知床を有する斜里町の一角に存在することにも、大きな意義があると思うのです。

創刊号から定期購読続 け 毎月待ちわびた新刊到着

■山崎さんにとって『アルプ』はどういう存在だったのですか

私は道南の生まれですが、家が貧しかったこともあって、中学卒業と同時に遠戚が営んでいた斜里の書店の住み込み店員になりました。休みもほとんどない丁稚奉公にも似た生活の唯一の楽しみが読書で、店にある本をむさぼるように読みました。

そうした生活を五年ほど続け二十歳になると、年季明けとでもいうのでしょいか、月に一日の休みと、いくらかの給料ももらえるようになりました。書店ですから本はいくらでも読めます。でも私は自分でお金を稼げるようになったら、手元にいつでも置きたい本は無理をしても買おうと心に決めていて、最初の蔵書として買い求めたのが、串田先生の『若き日の山』、そして『山のパンセ』だったのです。

読む者の心にスッと染みこんでくるような串田先生の文章が私は大好きでした。その先生が中心となり『アルプ』が創刊されたのも、ちょうどそのころで、当時としてはとて

も斬新で洗練されていたその雑誌に魅せられた私は、すぐに定期購読を始め、それから二十五年間、毎月、新しい号が届くのがなによりの楽しみになったのです。

『アルプ』は執筆者すべてが、山に代表される自然と真摯に向き合っていることが、ひしひしと伝わってくる文芸誌でした。個々の執筆者が自身の中にめいっばい蓄積した自然観、人生観を誌面上で一気に解き放つようなところがあり、私はそうした感性あふれる表現ができる方たちに、あこがれにも似た思いを抱いていました。

この雑誌は、同時に世の中に二十代の私がまだ知らずにいることが山

心をかき立ててくれる雑誌でもあったのです。

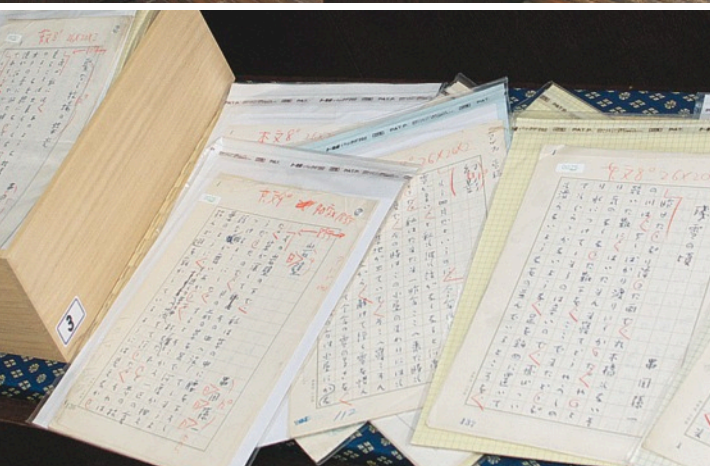
地元の自然の美しき知り 撮った写真が誌面を飾る

■山崎さんは写真家としても活躍されていますね

夏はリヤカー、冬はそりで本を配達する書店員にとって、オホーツク沿岸の厳しい自然は決してありがたなものではありませんでした。特に冬は流水で舟が使えないため、知床のウトロまで教科書などを背負って運んだほです。

当然、風景をじっくり眺めるゆとりなどなかったのですが、『アルプ』を読み続けるうちに、私は斜里岳や知床の山並み、オホーツク海の流水などの美しさに気付き、いとおしくさえ感じるようになったのです。

その光景にカメラを向けるようになったのが二十代後半です。撮影した写真を絵はがき代わりにして、『ア



書籍、版画、資料などが並ぶ展示室と多数の生原稿下



山崎さんの写真が掲載された『アルプ』117号と、山崎さんの写真集の一部(下)

『alp』の編集室に時候のあいさつ状などを送るうち、串田先生たちにも「北海道の片隅の熱心な読者」として知られるようになりました。

実はそれが縁で、知床の写真の依頼が舞い込み、『alp』に私の作品が掲載されたこともあるのです。まだ写真を始めて間もないころで、自分の写真が載った号を手にしてもなお信じられず、夢を見ているような気分だったことを覚えています。

以来、写真は私の大切な表現手段になりました。これまで大型写真集『氷海』、『日本の灯台』などを出版しているほか、今年十月にも『オホーツク―流水の季節―』という写真集も出す予定です。

ただ、あくまで私が本業としてきたのは二十八歳の時に書店から独立して手がけた事務機器販売の事業で、それが順調だったからこそ、写真を続けることもできたのです。四十代になったころには、商売も一定の成功を収めていましたから、多少なりとも地域の文化振興のお役に立とうと、自社の一角にギャラリーを開設したりもしました。斜里のような小さな町であっても、人々がさまざまな文化を享受し、心を豊かにできるような場所が必要だと考えたのです。そのギャラリーでは、一昨年、街

並み整備事業で建物が取り壊されるまでの二十五年間にわたり、通算三百三十五回もの展示をしました。地元の方たちの手づくり作品を並べたこともあれば、著名な作家の作品を紹介させていただいたことも少なくありません。そうした活動を通じて私が購入したり、寄贈を受けた作品も当美術館の大切なコレクションになっていきます。

今にして思えば、ギャラリーを開設しようとした発想の延長線上にあるのが現在の「北のalp美術館」で、私を育ててくれたこの土地への恩返しでもあると思っています。

終刊で心にぽっかりと穴 美術館の実現へ東奔西走

■美術館開設までの経緯を教えてください

写真が『alp』に掲載されたことなどをきっかけに、私は串田先生と個人的にもお付き合いする間柄になっていて、三百号での終刊も事前には知らされていました。

串田先生は「すべてのものに終わりがある。形だけ残しても、その精神が残らなければ意味がない。終わりが方が大切なのだ」というようなことを私におっしゃいました。

大規模開発などによる自然破壊が顕著になりだしたところで、「山で思索する」といった作家や芸術家が少なくなってきたのも終刊の一つの要因だったようです。時代の流れでもあったのですが、いざそれが現実となり、二十五年間、毎月読み続けてきた雑誌の新しい号が届かなくなると、私は心にぽっかり穴が空いたような気持ちになったのです。

このままでは、『alp』という文芸誌があつたことさえ忘れられてしまう。誌面に宿っていた自然讃歌の世界をなんとか後の世に伝えることができないか。そうしたい思いが込み上げてきて、気がつけば、自分の手で美術館をつくろうと決意していたのです。

とはいえ、私は北海道の田舎町の商売人に過ぎません。関係者に資料



毎年、発行している北のalp美術館だより「緑風」

提供などの協力をお願いして回ったものの、『alp』が金儲けに利用されるのではと心配した方も多かったようで、当初はなかなか同意が得られませんでした。

私は、営利が目的ではないこと、私財を使って建物などを整備し、入館無料での公開を予定していることなどを何度も説明して歩きました。そうした中、串田先生だけは、すぐに「ああ、いいよ」と言って段ボール箱いっぱい原稿をポンと渡してくれたのです。あの時は本当にうれしかったですね。

私の真意が伝わるにつれ、『alp』の執筆、編集関係者から原稿、原画などが次第に寄贈、寄託されるようになり、最終的にその数は約五万点にも達しました。建物は、三井農林斜里事業所の木造二階建ての旧社員寮を買い取って山荘風に改装しました。敷地の庭には私自身の手でシラカバを植えることから始めるな



『alp』創刊号と終刊号(上)
館内ではalp全号が閲覧できる

ど、コツコツと美術館の体裁を整え、ようやく開館できた時には終刊から十年近い歳月が流れていました。

感じてほしい「草原の風」 来館者の心癒す美術館に

■開館から十六年。今では小さいながらも、ユニークな美術館として知られていますね

『アルプ』の名付け親は詩人の尾崎喜八さんで、スイスの高山の豊かな牧草地のことだそうです。創刊号で串田先生は「山から下って来たものが、荷を下ろして憩わずにはいられないこの豊饒な草原は、山が文学として、また芸術として、燃焼し結

晶し歌となる場所でもあると思う」と書いています。

その「豊饒な草原」に集まった「アルプ作家」と呼ばれた方たちは当時すでに

経済の発展ばかり追求していくと、人間は一番大切なものをどこかに置き忘れ



再現される予定の串田孫一さんの書斎

てしまうのではないか、という共通の危機感を抱いていたのだと私は思います。

だからといって『アルプ』は、発行行為を声高に批判したり、「自然は大切だ」とストレートに主張するのではなく、山の素晴らしさや、そこで思索する喜びを丁寧じっくり描き出して見せることで、「人間にとって一番大切なものはなにか」と問いかけて続いていたのです。

この美術館がオープンした際、「北海道の斜里の、この美術館のあるところから、病める地球が見事に癒されて行く爽かな緑が、先ず人々の心に蘇り、ひろがっていくことを願っている」というメッセージを串

田先生は寄せてくださいました。私はまさにこれこそが当館の使命で、訪れる人々に緑の草原の爽やかな風を感じていただける場所にしたと思っていますすし、実際「なぜか癒される美術館」とおっしゃる来館者の方も少なくありません。

串田の書斎、居間を再現 二十周年が大きな節目に

■今後の抱負をお聞かせください

実は現在、ご遺族からの申し出を受けて、この美術館に串田先生のご自宅の書斎と居間を移築、再現する準備を進めています。私が以前、住宅に使っていた棟続きの部分を改築する予定で、開館二十周年となる二〇一二年の公開を目指しています。

串田先生は晩年、体調がすぐれず、結局、当館を訪れることがかなわなまま二〇〇五年に他界されました。気にかけてくださっていた知床の世界自然遺産登録が決まったのは、その数日後のことで、生きているうちにご報告できなかったことが残念になりました。

その串田先生の仕事場である書斎と、「アルプ作家」も集ったであろう居間が、多くの蔵書や遺品とともに公開できるようになるのは、この

うえない喜びです。当美術館にとって大きな節目となる事業で、私もすでに会社関係の仕事のほとんどを後進に譲り、その準備に専念しているところです。

私はこの美術館を個人の所有物だとは思っていません。そろそろ次の世代に引き継いでいくことを考えなければなりません。が、ゆくゆくは町民が誇る地域の財産として、「友の会」のような方式で運営していたければと願っています。

私は今、この美術館にいただけで幸せです。好きな作家の作品がそろい、その一つひとつが新たな感動を与えてくれる「桃源郷」です。私と同じような思いを抱く『アルプ』ファンは全国にいて、今も多くの方が訪れてくださいますし、最近では、ふらりと立ち寄り、熱心に見入っていく若い世代も増えてきました。

終刊から二十五年を経てもなお『アルプ』の自然讃歌は色あせることなく人の心を潤します。その世界に浸り、人間がもともと持っている自然を慈しむ心と呼び覚ましてみてください。当館を経由することで、斜里岳や知床の自然は、もっともっと素晴らしい表情を見せてくれると思いますよ。

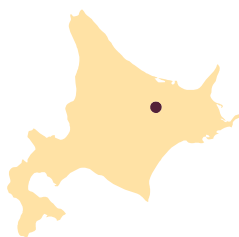


北のアルプ美術館の外観。シラカバ林も隣接している
(休館日は毎週月・火曜日。冬期間の開館は予約制)

ふんわり
こぼれ話 41『金色夜叉』ゆかりの松
熱海の海岸での別離から十年
北海道で再会した貫一とお宮

一八九七年から一九〇二年にかけて読売新聞に掲載された尾崎紅葉の『金色夜叉』は、明治期を代表するベストセラー小説として知られています。

主人公は一高生の間貫一と、その許嫁のお宮。曲折をたどる二人の恋と苦悩を描いた作品ですが、とりわけ、貫一を裏切った富豪のもとに嫁ぐことになったお宮を貫一が蹴り飛ばし、悔しさのあまり「一生を通して僕は今夜今夜を忘れない、(略)来年の今月今夜になつたならば、僕の涙で必ず月は曇らして見せる」などと言いつつ熱海の海岸の場面は有名です。

おけと
置戸町

町域の80%以上が森林という林業と林産加工の町です。人口は約3,500人。木工芸品「オケクラフト」の生産でも知られています。

実は、その貫一とお宮の物語は、十年ほどの歳月を経て、北海道を舞台に新たな展開を見せることになります。といつても、作者は紅葉ではありません。『金色夜叉』が一世を風靡している最中、紅葉は病没し、連載は未完のまま終了します。大正時代に入り、紅葉の作品を受けつぐ形で『続金色夜叉』

を著したのが作家の長田幹彦(二八八七〜一九六四年)で、こちらも好評を博し、続々編となる『金色夜叉終編』まで刊行されたのだといひます。

舞台となったのが現在の北見市の南西に位置する置戸町です。市街地の中心部、かつての国鉄駅跡にほど近い一角には幹彦直筆の句碑も建立されており、傍らの見事な枝振



『金色夜叉』ゆかりの松」と長田幹彦の句碑

ほっかいどうの本

(お近くの書店にない場合は
発行元へお問い合わせください
特記以外は税込価格です)

札幌から行く
産直ガイド

大町 香 著／亀畑 清隆 撮影
亜璃西社 発行
〇一〇二二一・五三九六
四六判 二百四十頁 一、三六五円



輸入食品の汚染や遺伝子組み換え作物など、「食の安全」が疑問視されている昨今、自分たちが納得し、安心できる「旬の味」を求め、「産地直送」が注目されています。

本書では、オカメ隊ことオマチさんとカメ氏が、三年にわたり訪れた直売店の中から厳選した百六十カ所の直売所と、二十八カ所の立寄りスポットを紹介しています。

札幌から日帰り可能な地域を九エリアに分け、直売所の特徴と写真のほか商品、開設期間、価格、連絡先・アクセスなどの基本データを収録。

検証 拓銀破たん10年

北海道新聞社 編・発行
〇一〇二一〇・五七四四
四六判 五百三十六頁 一、九九五円



とくに著者からのひと言「オマチのメモ」の情報は貴重です。
千歳市・北海道烏骨鶏ファームの「烏骨鶏の有精卵」、芦別市・中西さくらんぼ園のオリジナル品種「パール」のような、一般の店頭では入手困難な商品も紹介されています。
新鮮野菜に鮮魚活貝、自然卵、地酒、豆腐、手づくりチーズ…生産者とのコミュニケーションも産直ならではの味わいです。(小)

高度成長期、都市銀行十五行体制の一角を占め、一九九七年十一月に経営破たんするまで道内経済を支え続けた北海道拓殖銀行。本書は、拓



レールも撤去された旧置戸駅ホーム

る貫一。そこに現れるのが、はるばる置戸までやって来たお宮で、再会した二人はともに生きていくことを誓うというあらすじです。

りのマツには、こんな解説板が添えられています。

「略」熱海の海岸、涙の別れより十年目、お宮は置戸シイトコロ原野に農場「興農園」を経営する貫一と再会の夢を抱いて置戸駅に下車したところ、この松があまりにも熱海の松に似ていたので、思わずすがりより、しばし昔を偲んだと伝えられる」

長田幹彦の「続編」の舞台

『続金色夜叉』で描かれた貫一は、友人とともにこの地の農場主になっていました。お宮が嫁ぎ先で不遇な生活を送っていることを知った貫一は、過去のことを「ゆるす」と書いた手紙を送ります。そうしたある日、貫一は網走監獄脱獄囚の狼藉事件に巻き込まれ、その脱獄囚を殺してしまいます。罪の意識から自らも命を絶つ決意をし、吹雪の夜に、お宮に長い遺書をしたためる貫一。そこ

幹彦は大正初期、北海道を放浪旅行した経験があり、野付牛（現在の北見市一帯）の壮大な原始林の風景に強く心惹かれたことが、『続金色夜叉』の舞台設定へとつながったのだといえます。地元の人たちにとっても、開拓期の街を舞台にした文学作品があるのは名誉なことだったようで、戦後の一九五〇年代には有志たちが「お宮まつり」を開催したこともあるほか、一九八三年には町立図書館の文化事業として『再会の松』と題した一六ミカラー映画まで制作したと町史は伝えています。

開拓期の風景、今はなく

旧国鉄の置戸駅は一九八九年から、第三セクターが運営する「ふるさと銀河線」の駅となり、コミュニティセンターを兼ねた近代的な建物になりました。さらに二〇〇六年の全線廃止で駅としての役割も終えており、お宮が降り立った当時の駅の面影を伝えるものは、風雪に耐えられなくなるたびに植え換えられてきた「ゆかりの松」だけといえます。『金色夜叉』そのものを知らない世代が増える中、北海道を舞台にした続編の存在は、静かに忘れ去られる運命なのかも知れません。



「ゆかりの松」解説板

銀破たんから十年が経過しての「中間報告」です。

バブル期に不動産融資にのめり込み、エイペックスリゾート洞爺のカブトデコムや、テルメリゾートのソフィアグループなどへの巨額な不良債権が経営を圧迫し、創業百年を目前に都市銀行初の経営破たん追い込まれました。北洋銀行への経営譲渡は、「小が大をのむ」前代未聞の銀行破たん処理となりましたが、一刻と変化する状況を追いつけました。その後の道内金融地図の変化、企業の苦闘、元拓銀役員の経営責任、元行員の奮闘などについても記述しています。

また、拓銀破たん後も、ニトリやアインファーマシーズなどのように業界最大手に成長した企業や、北海道ならではの取り組みをしている企業・団体をクローズアップし、北海道経済の針路を探り、未来への提言をも収録しています。（場）

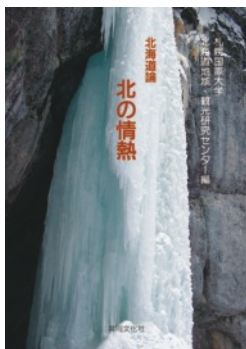
北の情熱

札幌国際大学北海道地域・観光研究センター編
共同文化社 発行
（〇一）二五・一・八〇七
A5 百五十六頁 一、二〇〇円

「パン好きが出会った北海道小麦と北海道のパン職人」ブリザード

ドフラワーで北海道に春を」「北からの発信者たち―北海道の文学」：北海道の歴史・文化・財産・課題など、多岐にわたる分野から講師を迎えて考察した札幌国際大学の教養科目「北海道論」。その二年間の講義十三編を収録しています。

先住民から学ぶ「大地・愛・勇気」、食の「安心・安全」、地域独自のマーケティング、生産・加工のこだわり、新しい表現、人とのふれあい、地域の活性化、原点の文化、発信、教育、観光など、本書は未来を



担う世代への期待を綴ったものであると同時に、それを伝える先輩・親が果たす役割の重要性についても考えさせられます。

どんな世代でも、さまざまな分野について学習し、表現し、行動を起こすこと、それが、これからの北海道にとって必要不可欠であることを伝え、共に未来に向かって歩もうという講師たちからのメッセージが詰まっています。（樋）

新刊情報

書名の下に数字は日本図書コード（ISBN）特記以外は税込価格
お近くの書店にない場合は発行元へお問い合わせください

おさんぽ日和 さつぽろ近郊のほほん旅

すずき もも 著 978-4-98453-461-2

北海道鉄道駅大図鑑 978-4-89453-464-3

本久 公洋 著

ほっぺおちの旅 978-4-89453-465-0

北海道のおいしいワケをたずねて

佐々木 小世里 絵／柳 亜古 文

A5 九十六頁 一、五七五円

北海道新聞社

000 札幌市中央区大通西3丁目

（011）210・5744

北海道教育関係職員録2008年度版

北海道教職員組合 編

B5 七百十六頁 八、〇〇〇円

北海道教育評論社

005 札幌市東区本町一条一丁目

（011）785・3231

経営・地域の機械化体系改善計画

桃野 寛 監修 978-4-93845-15-1

A4変型 百二十八頁 一、四〇〇円

北海道協同組合通信社

000 札幌市中央区北4条西13丁目

（011）209・1003

ほら、いつだって しろくまブック2

そら 写真・文 978-4-90253-54-4

A6 三十二頁 一、〇五〇円

エムジー・コーポレーション

062 札幌市豊平区平岸5条14丁目

（011）824・7511

2007年崩落、それでも生きてゆく

朝日新聞の夕張報道全記録1 978-4-90259-26-0

朝日新聞北海道支社報道センター 編

A5 四百四十六頁 三、三六〇円

寿郎社

060 札幌市北区北7条西2丁目

（011）708・8565

豊かさをつかむために 落ち穂を残す精神

元田 厚生 著 978-4-89115-175-1

A5 百九十八頁 二、一〇〇円

中西出版

007 札幌市東区東雁来3条一丁目

（011）785・0737

アラスカ極北飛行 978-4-915746-47-5

湯口 公文・写真

A5 二百六十頁 一、六八〇円

須田製版

063 札幌市西区二十四軒2条6丁目

（011）621・1000

爪匂@都市のデザイン 978-4-87739-147-8

青木 曲直 著

A7変型 二百二十頁 四〇〇円

共同文化社

060 札幌市中央区北3条東5丁目

（011）251・8078

自費出版・団体出版

明日をうたう 978-4-90164-96-9

齊藤 春敏 著

四六判 三百六頁 一、三六五円

齊藤まき子

061 札幌市南区藤野一条10丁目

信念は曲げず

山口 哲夫 著・発行

四六判 四百頁 一、九〇〇円

146 東京都太田区下丸子2丁目

樺太樞保の思い出

瀬川 正敏 著・発行

四六判 二百二十頁

001 札幌市北区北16条西3丁目

自分史 これまでの足跡とあらたな旅立ち

松村 義則 著・発行

A5 二百八十頁

004 札幌市厚別区厚別中央一条7丁目

歌集 絹の雨

本郷 すみ子 著

A5 百七十四頁

062 札幌市豊平区平岸3条12丁目

鈴木 洋子

北海道洞爺湖サミット

世界へ発信 環境・食料・エネルギー



G8に加え中国やインド、アフリカ諸国の首脳など札幌、洞爺湖畔に集結。
各国首脳の円卓会議、拡大会議、夫人たちの交流、先住民民族サミット、こども環境
サミット…北海道初のサミット開催決定から閉幕まで、写真で綴る記録集。

A4 六十四頁 一、〇〇〇円 978-4-89453-466-7

北海道新聞社／編・発行

（011）210・5744 <http://www.aurora-net.or.jp/doshin/book/>

検定試験のお知らせ

「ほっかいどう学」検定試験

事前講習会も5会場で開催

北海道の現在を見つめ、過去を知り、未来を
考える「ほっかいどう学」の第一回検定試
験が今秋に開催されます。その事前講習会
が旭川会場（8月24日）を皮切りに始まりま
す。受講料は1,500円（テキスト代別）。な
お、検定申し込みは9月30日までです。

■検定試験日時・会場

2008年10月26日（日）午後2時～

札幌市・旭川市・函館市・釧路市・帯広市

■検定内容と料金

入門検定 基礎知識編・50問・60分

一般2,500円 高校生以下1,000円

上級検定 応用編・100問・90分

一般3,000円 高校生以下1,000円

■主催・申し込み・問い合わせ先

ほっかいどう学検定推進機構

札幌市中央区北2条西7丁目 〒060-0002

から2・7・9階 北海道生涯学習協会内

（011）231・4111（内線3670、3673）

ホームページ <http://www.hisak.jp/kenrei/index.html>

お詫びと訂正

7月号新刊情報でご紹介した『北海道詩史
補遺』の連絡先は織部方とありますが、綾
部方の誤りでした。また、北海道詩人協会内
の任務変更により連絡先が「〒066-0070 千歳市
あずさ3丁目12・9・2 斉藤方」に変更に
なっております。謹んでお詫びを申し上げます。
ますとともに、変更をお知らせいたします。

紙の
表のこと

38センチ×51センチ

古河講堂 須貝 明美

「北海道大学正門から入って少し歩くと、
右手にひと際目をひくモダンな木造建築
が見えます。古河講堂です。明治42年に、
古河財閥の古河虎之介の寄附の一部で建
てられたそうですが、100年近い年月
を経て、今なお北大の顔として美しい
まま現役で活躍しているのは、頼もしく
嬉しいことです。」

GEM木版画会会員 札幌市在住